

「読書離れ」を疑う

「読書離れ」は本当か
「一丁一々から見る実像

「最近若者の読書離れが進んでいる」とよく言われる。テレビやインターネット、学校の現場でも、あたかもそれが疑いようのない事実であるかのように語られることが多い。しかし、その言葉はどこまで事実に基づいているのだろうか。本当に人々は本を読まなくなっているのか。それとも、読書の形が変化しているだけなのか。二〇二五年にかけて、小学生では増加、中学生でも増加、高校生では横ばいとなっており、いずれの年代においても大きな減少は見られない。

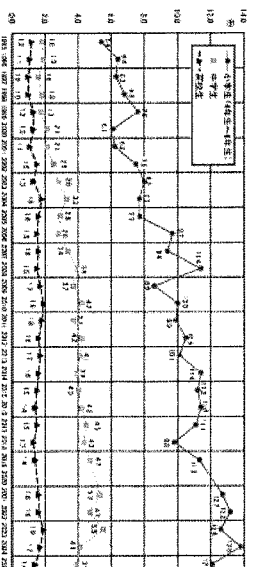
全国一丁一々からみる「読書離れ」

全国の「学校図書館調査」(下図)調査「より」のグラフを見ると、一か月の平均読書冊数は一九九〇年から二〇二五年にかけて、小学生では増加、中学生でも増加、高校生では横ばいとなっており、

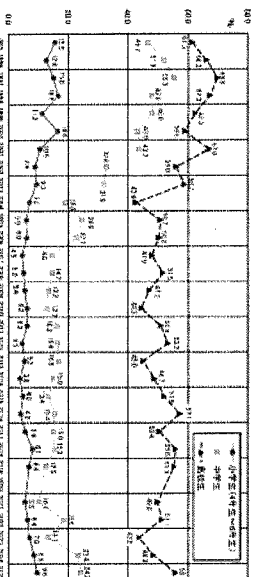
統計や文献にあたると同時に、小

しているかを検証するため、調査

平成31年分5月1か月間の平均読書冊数の推移



平成31年分の不読書(の冊回)の推移



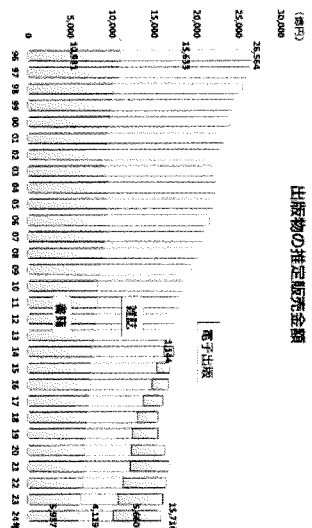
少なくとも、冊数の推移から見る限り、十代の読書量が減少しているとは言い切れない。

不読者の割合の推移を見ると、二〇〇〇年代を境に増加するのではなく、むしろ減少傾向が見られる。特に中学生においてはその傾向が顕著であり、この点からも「読書離れ」が進行しているとは断定できない。この背景には、朝読書の実施や学校図書館の利用推進など、学校側による読書を促す教育体制が整えられてきたことが一因として考えられる。

中・高すべての年代において年々減少しており、不読者の割合についても同様の傾向が見られた。このことから、雑誌離れは進んでいると考えられる。

出版物の売り上げ(下図・出版科学研究所の『出版指標年報二〇二〇年版』より)を見ると、一〇二〇年代から二〇二〇年代にかけて「書籍+電子書籍」の売り上げはほぼ横ばいで推移しているのに対し、雑誌の売り上げは明確に減少しており、この点からも雑誌離れの進行が裏付けられる。

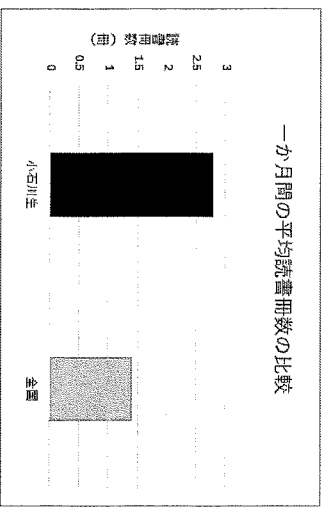
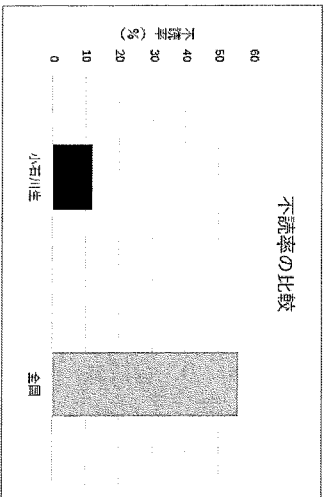
小石川生の読書実態



次に、本校における調査結果を見ていく。本校では、四年生である十七期生二五七名を対象に「学校図書館調査」と同様の内容のアンケートを実施した。回答者は全体の約七〇パーセントを占めており、読書への関心の有無にかかわらず、比較的幅広い生徒の実態を反映していると考えられる。回

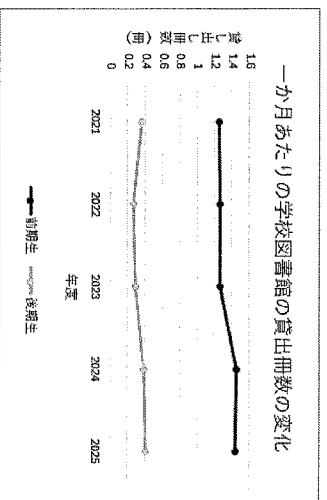
答結果を見ると、一か月間の書籍の平均読書冊数は二・八冊であり、全国平均と比較して高い水準にあった。

また、不読率も二・三六パーセントと比較的低い値を示している。これらの結果から、一定の読



また、不読率も二・三六パーセントと比較的低い値を示している。これらの結果から、一定の読

さらに、学校図書館の貸出冊数について調査したところ、全校生徒数を九六〇人として概算すると、一人あたりの一か月の貸出冊数は、二〇二二年度から二〇二五年度にかけて前期生が約一・三冊、後期生が約〇・三冊で推移しており、いずれもほぼ横ばいであった。これらの数値は全国平均を下回っているが、図書館の貸出冊数のみに基づくものであり、家庭での読書や購入した書籍は反映されていない点には留意する必要がある。



習慣をもつ生徒の存在が明らかとなった。本校生徒の勤勉さや知的好奇心の一端がうかがえる。

むしろ注目すべき点は、コロナ禍による図書館利用促進指導との真逆の状況があったにも関わらず、数値に大きな減少が見られなかったことである。このことから、本校においても「冊数の減少」という意味での読書離れが進行している

とは言いたい。

以上の全国調査および本校の調査結果を踏まえて、「読書離れ」という言葉は、必ずしも読書量そのものの減少を指しているわけではなく可能性がある。むしろ、離れる媒体や読書の形、そして読書の場や環境が変化していることにより、生徒の認知のずれである

と、一人あたりの一か月の貸出冊数は、二〇二二年度から二〇二五年度にかけて前期生が約一・三冊、後期生が約〇・三冊で推移しており、いずれもほぼ横ばいであった。これらの数値は全国平均を下回っているが、図書館の貸出冊数のみに基づくものであり、家庭での読書や購入した書籍は反映されていない点には留意する必要がある。

高校生にとって

読書をするメリット

本を読むことはどのようなメリットが生じるのだろうか。小石川生の中には、読書なんかしたって将来の役に立たない、時間が無駄だなんて考えている人値に大きな減少が見られなかったことである。このことから、本校においても「冊数の減少」という意味での読書離れが進行しているとは言いたい。

「読書離れ」という言葉そのもの減少を指しているわけではなく可能性がある。むしろ、離れる媒体や読書の形、そして読書の場や環境が変化していることにより、生徒の認知のずれである

と、一人あたりの一か月の貸出冊数は、二〇二二年度から二〇二五年度にかけて前期生が約一・三冊、後期生が約〇・三冊で推移しており、いずれもほぼ横ばいであった。これらの数値は全国平均を下回っているが、図書館の貸出冊数のみに基づくものであり、家庭での読書や購入した書籍は反映されていない点には留意する必要がある。

とを讀み取る。だからと言って、高学歴になるためには読書が

絶対に必要だとか、本を読んでもいい、国語のテストで点数が取れるようになるという乱暴なことをいつもしはなさない。しかし読書の有無は、大学受験などに、少なからず影響を与えていると考えられるだろう。東大出身の著作家である西岡 啓成氏も、著書『東大読書』で次のように述べている。「実は「地頭」は本の読み方を要するだけで鍛えられるものなので、本を読むという行為によって、脳機能を上げることができるのだ。これらのデータから、読書は読解力・論理的思考力を向上させるうえで重要な行為であり、それを無視するのは勿体ないと考えられる。より身近な例で考えると、読書によって小論文やレポートなどが書きやすくなるとも考えられる。

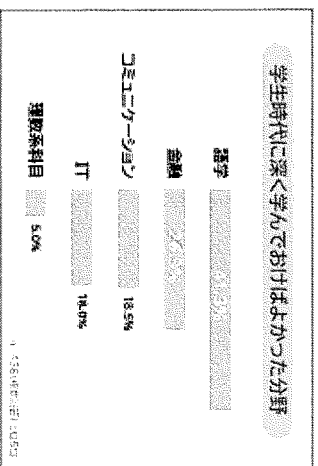
表18 最終学歴と読書の相関係数

	読書冊数	読書時間	読書量
最終学歴	.081	.078	.083
制御前	.049	.047	.051
制御後			

*: p<.05 ***: p<.01
制御: 世帯年収・父親の学歴・母親の学歴を制御

村上慎一氏の『読解力を身につける』では、読解力を身に着ければ課題文を正確に理解できるため、小論文などの執筆に際しても、役に立つと書かれている。小論文を書く時でも、課題文をいし課題を徹底的に読み解くことで、文章を書くことができる。また、文章を書くことは、読者が読解した文章を自分の表現に生かす作業であるとも述べられている。つまり読書と読解力の定着と文章を書く力の定着という連関がみられるという点だ。日々レポートや、課題文などに追われている小石川生にとつて読書という行為はともあつて、工など、学校の授業ではあまり取り扱われることのない分野も深く学び直したいと思つている人が多いということが分かる。角度を変えると、社会人になつてからなかなか良い時間の使い方だと思つて、何より、高校時代に身に着けたことは、学生時代に深く学ぶなかたことで、現状に何しはなかつたことで、現在の大学生活、社会生活にも、役に立つスキルである。

次に近い将来、つまり私たちが成人して社会人になつた時に、読書を怠つたということが、どのような影響をおよぼすのかを考察しよう。まず、下を見てもらいたい。このグラフは、株式会社R&Gが、社会人四三八人にとつたアンケートである。このアンケートをみると、金融、コミュニケーション



ン、工など、学校の授業ではあまり取り扱われることのない分野も深く学び直したいと思つている人が多いということが分かる。角度を変えると、社会人になつてからなかなか良い時間の使い方だと思つて、何より、高校時代に身につけたことは、学生時代に深く学ぶなかたことで、現在の大学生活、社会生活にも、役に立つスキルである。

次に近い将来、つまり私たちが成人して社会人になつた時に、読書を怠つたということが、どのような影響をおよぼすのかを考察しよう。まず、下を見てもらいたい。このグラフは、株式会社R&Gが、社会人四三八人にとつたアンケートである。このアンケートをみると、金融、コミュニケーション

ターネットを用いる方法と読書では確かに便利だが、情報の確実性という面から考えると、少々不安を覚えるものでもある。特に金融に關しては、一度大きな失敗をし てしまうと、その後の実生活に支障が生じる。そのような重要なことを学ぶ際に、まだ知識の少ない学生がインターネットを用いてしまうと、やはりリスクが大きいのではないかと、そこで残る選択肢は、読書だ。著者が本を書く際には、執筆内容に責任が生じる。そのため、金融などの重要なことを学ぶ際の平均インターネット利用時間は、平日二二五・八分、休日三二七・八分、休日は二七五・八分、休日三〇九・四分である。つまり読書は一日四時間から六時間もインターネットを視聴しているという点だ。スマートフォンがメールやゲームにも使われることを考えると、利用時間とはいえないとわかつた。受験期、大学生活、社会生活と人生経験を重ねていくにつれて、読書の有無による影響は大きくなっていくにえると常にスマートフォンが手元にもかかわらず、読書に選ける時間もあることとを選手にとり、その利が小説ではなくマンガである点だ。次に、電子書籍の利用時間が短く点である。前者では、読書は小説のみと考えるのならばマンガを目的として利用している層の電子書籍の利用は伸び悩む可能性が高い。後者は利用時間を増やす取り組みが必要だ

読書離れを解決するには

今まで読書離れについて様々な観点で見えてきたが、ここでは解決方法について考えていきたい。

まずは読書離れの主な要因を考えていこう。一番に考えられるのはスマートフォンやタブレットの使用が読書の時間を奪っていることだ。総務省の令和五年度の情報通信メディアの利用時間と情報行利用率はそれぞれ七・九パーセントと一〇・一パーセントでも低い。しかし、ナイル株式会社との調査によると、電子書籍を利用した人もしくは過去に利用したことがあるという人の割合は十代で五七・五パーセント、二十代で七二・七パーセントにも及ぶ。これはインターネット上で電子書籍を用いてから六時間もインターネットを視聴しているという点だ。スマートフォンがメールやゲームにも使われることを考えると、利用時間とはいえないとわかつた。受験期、大学生活、社会生活と人生経験を重ねていくにつれて、読書の有無による影響は大きくなっていくにえると常にスマートフォンが手元にもかかわらず、読書に選ける時間もあることとを選手にとり、その利が小説ではなくマンガである点だ。次に、電子書籍の利用時間が短く点である。前者では、読書は小説のみと考えるのならばマンガを目的として利用している層の電子書籍の利用は伸び悩む可能性が高い。後者は利用時間を増やす取り組みが必要だ

う強硬な対策ではないため、若者にも受け入れられやすいだろう。そこで電子書籍の利用について詳しく考えていきたい。電子書籍版には貸し出しの電子書籍リーダーと、インターネット上でダウンロード、インストールして利用するものがある。二つには若干の違いがあるが、果たしてどちらの利用がより多くの読書につながるのだろうか。前述した総務省の統計では、十代二十代の電子書籍リーダーの利用率はそれぞれ七・九パーセントと一〇・一パーセントでも低い。しかし、ナイル株式会社の調査によると、電子書籍を利用した人もしくは過去に利用したこと

